

だして懸垂下降した。

滝の下で軽く昼食をとって、下降を再開。この下は川原となっており、5分程下ったところが本流であった。

[タイム] 下降開始(10:20)→右俣出合(10:45)→右俣終了(11:00)→下降終了(11:55)

八溝山周辺の沢

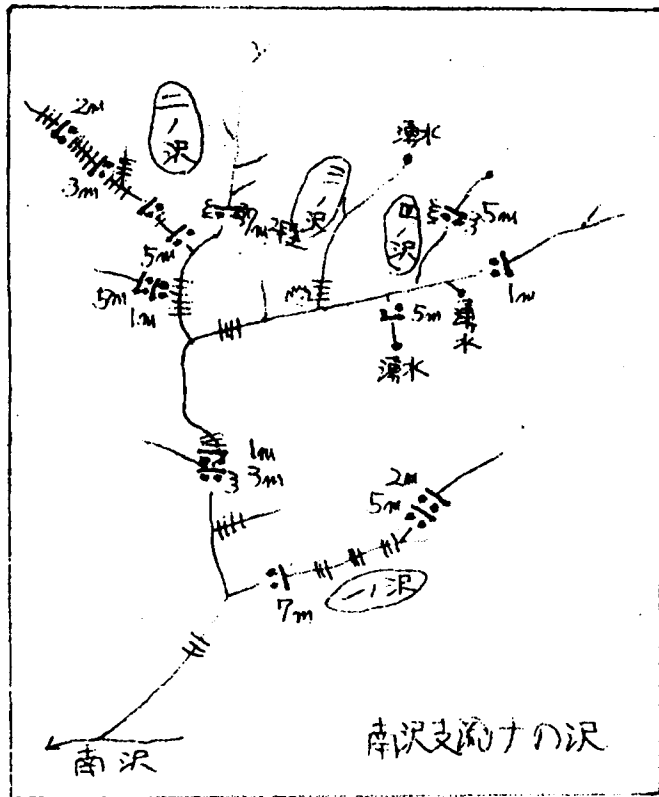
八溝山塊宮川源流の調査を始めて2年目。この流域は、下部が花崗岩層で上部は第3紀層。滝は花崗岩層の部分に出てくる。南沢に何回か通ううちに、支沢のいくつかに興味を覚えるようになり、より詳しい調査を実施しようという気になり、集中的に遡行調査をすることとした。

南沢支流ナノ沢(仮称)と
その支流一ノ沢、三ノ沢、
#ノ沢右俣、左俣、四ノ沢

1987年9月15日

11:05下降開始。雪面を下る要領でウェディングシューズのかかとを土にくいこませるようにして、ものすごく急な斜面を下る。下りきった所で細い流れが出てきた。第3紀層の崩れた岩屑が一杯詰まった沢である。20分程下ったところで四ノ沢(仮称)出合。この沢もできるだけ多くの支沢の偵察をしながら下降することになっている。

四ノ沢は5分程遡ったところに5mの滝があり、シャワーで直登する。第3紀層の地域であるから、滝など期待していなかったのに。でもそれだけ。あとは岩屑だらけのおきまりの状態であった。



本流に戻って10分も下ると三ノ沢(仮称)出合。三ノ沢はこの地域の沢の典型的ともいうべき状態。崩れた岩屑がいっぱい詰まったままで源流へ。水源はその岩屑のなかから湧き出してくる清水であった。

本流に戻って5分程下ると花崗岩地帯に入る。白いナメ床も出てきた。12:40二ノ沢(仮称)出合。花崗岩地帯に入ったからには多少は期待が持てる。小さなナメを越えて10分程進むと二俣。左俣は5

mの滝がかり、右俣もすぐ先に7m2段の滝がかかっている。まずは右俣へ。フリクションのよくきく岩で、シャワーで直登して上に出る。ところが滝の上は岩質が第3紀層に変わり、平凡になってしまった。左俣は出合の5mを直登すると、あとは源頭まで花崗岩地帯を流れ、小滝をまじえながらナメが続く。源頭は急峻なナメ状となって稜線に突き上げていた。

本流に戻って下降を再開する。小滝が出てきてちょっと期待させたが、また平凡となって一ノ沢(仮称)出合。一ノ沢は水量が少なかったが、出合から見える位置に7mの滝をかけている。ど真中を登る。水量が少ないため、シャワーにはならなかった。滝の上はナメが断続的に続いて5mの滝となる。直登して上に出るともう源流であった。引き返す。帰路二つの滝はクライミングダウンとなったが、下の滝の上部ではちょっと緊張した。

本流の方はもう変化の乏しい流れとなった。14:05下降終了。(1)

[タイム] 下降開始(11:10)→四ノ沢出合(11:30)→四ノ沢終了(11:45)→三ノ沢出合(12:10)→三ノ沢終了(12:25)→二ノ沢出合(12:40)→二俣(12:50)→右俣終了(13:05)→左俣終了(13:20)→ナの沢下降終了(14:05)